白の、毒

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白の、毒

【Ｎコード】
Ｎ０９８３Ｇ

【作者名】
久芳

【あらすじ】
郁はアルバイトで、間室紡という画家のモデルをやっている。彼は特殊な体質を持ち、普通の人と同じ生活をすることができない。白いものすべてが、彼にとって、毒に値するのだった。

1

「僕はいつか、白いもののせいで死ぬんだと思うよ」
まるで他人事のように、あっけらかんと彼は言った。
「子供の頃から比べたら全然いいんだけどね。今でも白いご飯は食べられないし、シャンプーの泡もだめなんだ」
あたしは決して彼のほうを振り返らず、窓枠に体をあずけながら、手持ち無沙汰に胸元のタオルをいじって糸を引っ張り出していた。
「不思議と、色がついたものは大丈夫なんだよ。パンも、玄米とか、思いっきり焼いたものとか、そういうのなら平気」
「じゃあお赤飯なら大丈夫なんですか？」
「そう。おかしいよね」
ははっと笑う声は低いけれど澄んでいて、すんなりとあたしの耳に届いてくる。開け放った窓から吹き込む風。部屋に満ちている油のにおい。たえることのない彼の話し声と、とまることのない手の動き。
彼の視線はあたしのむきだしの背中に向けられ、ジーンズをはいた脚にはまったく興味を示さない。あたしは背中が丸まらないように気をつけながら、外を見つめ続けた。
今日もいい天気。まぶしい太陽に、澄んだ青空。それから、おいしそうな白い雲。
けれど彼は、その白さを受け入れることができない。
「……そろそろ、休憩にしようか」
彼のその言葉で、ようやくあたしは視線から解放された。
「ちょっと時間かけすぎちゃったね。郁（いく）ちゃん、身体痛くない？」
「大丈夫です。コーヒー、いれますか？」
僕がやるからいいよ、と彼が言う。その視線が妙に泳いでいるな

と思ったら、あたしの胸を隠すバスタオルがずれて、見えそうになっているからだった。
「ごめんね、無理なお願いして。普通の服着てやってもいいんだけど……」
「いいんです。仕事ですから」
素肌の上にパーカーをはおり、あたしも彼に続いて手伝いをする。アトリエにはキッチンがないけれど、水道とポータブルのガスコンロぐらいは置いてある。やかんを火にかけて、ドリッパーにコーヒー豆を入れる彼に言われて、あたしは戸棚からクッキーを出した。
「白いものがだめって言うわりには、砂糖とかミルクもあるんですね」
「コーヒーに溶けると白くなくなるから大丈夫なんだ。さすがに、直視はできないけど」
絵の具がついた手袋を新しいものに変える彼は、常にサングラスをかけている。今日の色は紫で、それは上着のシャツの色と同じ、黒に近い深紫だ。
「間室さんは、やっぱり白い服もだめなんですよね？」
「そうだね、それこそ大変なことになる。……もし結婚式を挙げることになっても、白いタキシードは着れないなぁ」
長い前髪をかきあげ、サングラスの向こう側で、彼――間室さんは目を細めて笑った。

○

間室紡（まむろつむぐ）という名の画家を、あたしは今まで知らなかった。
絵画といったらピカソとゴッホの名前ぐらいしか出てこなくて、油絵を描くにはとても時間がかかることや、絵の具に独特のにおいがあることなど、まったくもって知らなかったのだ。このアルバイトしなかったら、あたしは一生、彼のことを知らなかっただろう。
「どうぞ。熱いから気をつけてね」

「ありがとうございます」
アトリエの隅にあるテーブルに、あたしと間室さんは向かい合って座った。
フリーターとしてその日暮らしをするあたしに、このアルバイトを紹介してくれた親戚は、医療関係の仕事をしていた。どうしてそんな人が油絵のモデルなんて紹介してくれるのだろうと思ったら、間室紡本人もまた、医療に関わっている人間だったからだ。
医者や看護師ではない。彼は患者だ。
とても珍しく、今まで見たことも聞いたこともないような、奇妙な体質をしていた。
『僕、白いものがだめなんです』
上から下まで、それこそ手の先まで黒で統一していた間室さんに初めて会ったとき、あたしは最悪にも白いワンピースを着ていた。親戚は間室さんに関することを一切教えてくれず、紹介したあとは関わることもほとんどない。あるといえば、偶然、彼の診察の日にあたしのバイトがぶつかるときだ。
間室紡という画家は、白いものを見ることも食べることも触れることもできない。白いものアレルギー……というよりも、白いものは彼にとって毒であり、刃であり、自分の体を傷つける最大の凶器なのである。
彼はその体質のため、ほとんど外出をせず、仕事という仕事もしていなかった。研究という名目で治療と生活援助を受け、油絵を描くことで日々をすごしているらしい。
「間室さんは……いつごろから白いものがだめだって気づいたんですか？」
「いつなんだろうね。物心つくときにはもう白いものは僕から遠ざけられていたから。でも生まれたときの写真は、ちゃんと白い産着に包まれてるんだよ」
ちなみに今日の下着は黒だけど。そう言って、彼はステンレスのカップに口をつけた。

間室さんのアトリエには、白いものがほとんどない。あるといえばキャンバスや絵の具だけ。棚などはほとんど木製で、小物は青や紫の寒色系。それは彼の住まいも同様だった。

「白いものがだめっていっても、気をつけさえすれば日常生活に支障はないからね。白いものにも色をつけちゃえば、食べられるし着られるし、触れるし。歯磨き粉も石鹸も、シーツの色だって、今はいろいろあるんだし」

けれど何より、彼が困るのは、本業であるはずの絵を描くときだとあたしは思う。

2

間室さんはサングラスごしにじゃないと、白いものを見ることができない。横断歩道ですら直視すれば危ないらしい。素足で歩こうものなら大事だ。だから絵を描くときもサングラスをかけ、手に絵の具がつかないよう仕事用の手袋をいくつも持っている。

そんな彼の肌は、アトリエにこもってばかりいるので白いのかと思いきや、そうでもない。かといって、色黒なわけでもない。むしろあたしの肌のほうが何倍も白く、モデルとして採用されたのもそのおかげだった。

彼が今描いている絵は、このアトリエの部屋の一角をモデルにしているらしい。部屋いっぱいに光を取り込む窓を開け放ち、風にカーテンを揺らめかせながら、四角く切り取られた青空を描く。外で大きく枝をのばす木。そしてあたしの、窓から空を見上げる後ろ姿。

空にはもちろん雲が浮かんでいるし、紺色のカーテンも絵の中では白く描かれている。あたしの背中も実物より白い。その『白』はとても綺麗で、ただの白い絵の具を塗っているわけではなく微妙な折り合いをつけているのもよくわかる。彼は『白』が見えない状態で、とても綺麗な絵を描いていた。

「サングラスしてたら、赤とか青とか、黒くなって見えませんか？」

サングラスをしている以上、少なからず視界の色が変わってくる。それが顕著に現れるのは白いもので、たぶん間室さんが見る空には、紫色の雲が浮いているはずだ。

「生まれつき赤や緑の色がわかりづらい人でも、車の免許は取れるんだよ。その人の見えかたで、信号の赤と青がちゃんと区別されてるからね」

「……うん？」

突然話が変わったように思えて、あたしは変な返事をしてしまう。それに彼が笑って、わざとそういう言い方をしたのだとわかった。

「サングラスをかけても、その視界の中で、赤は赤だし白は白なんだよ。普通の見え方とはちょっと違うけど、慣れればちゃんと色がわかるんだ」
「なるほど……」
それでもきっと、微妙な色の変化には戸惑うはず。けれど間室さんの繊細な絵には、違和感というものをほとんど感じなかった。
冗談交じりに、間室さんが「ほかにご質問は？」と言う。こちらから病のことを訊くのをためらっていたあたしは、ここぞとばかりに日頃の疑問を口にした。
「もし……白いものを食べちゃったりしたら、どうなるんですか？」
「お腹壊したり吐いたりすればまだいいほうかな。子供の頃は即救急車で運ばれたんだけど、病院って白いものばっかりだから、よけい悪化して、大変だったんだ」
お米の味はわかる。けれどそれが毎日、赤や黄色で着色されたものだとしたら……考えるだけで食欲がうせてしまう。
「じゃあ、白いものに触ったら、どうなるんですか？」
「……やってみる？」
「えっ」
戸惑うあたしに、間室さんが、おいでおいでと手招きをした。
訊いた手前、やっぱりいいですなんて言えそうにない。あたしが呼ばれるまま彼の前に行くと、うやうやしく手を取られた。
「僕はこうやって手袋ごしにじゃないと、郁ちゃんに触れないんだ。肌の色だとしても、やっぱり白すぎるものは苦手で……だからパステルカラーのものもあまり使えない」
壊れ物でも扱うようにやさしく握った手を、彼は自分の首元へと寄せてくる。シャツのボタンを二つはずし、はだけた胸元を見せた。
「触っていいよ」
「でも……」
「大丈夫、僕もそれなりに抗体ができてるから。手の甲で、すーっと、撫でてみて」

間室さんが、手を離す。あたしはためらい、ちらりと彼の顔を見た。
「大丈夫だって、倒れたりしないから」
ほら、と、うながされるままに、あたしは初めて、彼の肌に触れた。
間室さんの身体は、まるで凍えているかのように冷たかった。あたしが触れたところだけが急に熱くなり、肌が脈打ち始める。異変に気づいて手を離せば、今まで触れていた皮膚がどろりと溶けた。
「――間室さんっ！」
「別に、まだ触っててもよかったのに」
青ざめるあたしとは対照的に、彼は実に楽しそうだった。あたしが触れたところが、赤くただれている。まるで火傷をしたときのように、皮膚が伸び、痛々しい水ぶくれができはじめていた。
「もう一回やってみる？」
「嫌です！」
彼には冗談のつもりだったのだろうけど、あたしは全力で拒否する。自分が思っていた以上のことが起きて、足が震えていた。

3

「ごめんなさい……」
「郁ちゃんが謝ることじゃないよ」
シャツのボタンをとじて傷跡を隠す間室さんは、動揺のおさまらないあたしを見て、ばつが悪そうにうつむいた。
「僕のほうこそ、ごめんね。久しぶりに誰かに触ってもらえると思ったら、嬉しくって」
あたしがこんなにうろたえるとは思わなかったのだろう。しゅんと頭をたれて、間室さんは自分の手袋を脱ぐ。握ったり開いたりしながら、めったに開放されない手をいたわっているようだった。
「誰かに触るだけでも大変だからね、人肌が恋しかったんだ。ごめんね」
間室さんが、笑う。いつものははっと吐き出すような笑みに、あたしの手に残る、彼の冷たい肌がくすぶりだす。
「……郁ちゃん？」
気づけばあたしは、彼を抱きしめていた。
椅子に座ったままの彼の頭を、包み込むように胸に抱く。こうすればあたしは肌に触れないまま、彼に触れることができた。
間室さんが、おどろいて離れようとする。ありったけの力で、あたしはそれを阻止した。
彼の身体が冷たいのは、病のせいで、長く人に触れていないからかもしれない。じかに触れてはいけないのなら、こうして服を隔てればいい。少しでも、お互いの体温を感じられれば、そうしたら彼は寂しそうな顔をしないかもしれない。
サングラスの奥の、柔和な瞳。初めて会ったときから、そのあたたかさは消えることがないのに。その奥に潜む、寂しそうな泣き出しそうな感情もまた、消えることがなかった。
彼の冷たい肌が、どうしてこんなに悲しいのだろう。

間室さんはしばらく、困惑した様子であたしに抱かれていた。けれど次第に意図を察したのか、彼もまたあたしの腰に腕をまわし、そっと頬をすりよせてきた。
「……ありがとう、郁ちゃん」
ささやく唇と吐息が、パーカーごしにあたしに触れる。触れ合うところから、彼の鼓動が伝わり、彼の低い体温も伝わってくる。
すこしでも彼を暖めることができればと、あたしは彼の頭を、いっそう強く抱きしめた。

○○

「白いものがだめって言うけど、間室さんの歯は白いですよ?」
瞳を囲む白目だって、『白』と名がつくほど白い。彼の言うことをそのまま考えたら、彼の体を作る骨ですら、毒になってしまうのではないだろうか。
「なんかね、生まれついて持ったものは大丈夫みたいなんだよ。昔はそれですらだめだったみたいだけど、人間、成長するとたくましくなるもんだね」
あたしは決して間室さんを振り向かず、いつもどおり、空を見上げて話をしていた。
抱きしめた一件以来、あたしは間室さんに指一本触れていないし、彼もまた、そのことについて触れてこない。このあいだのことはなかったかのように、またいつもどおりの、画家とモデルに戻っていた。
けれどあたしは、正直、あのときのことを忘れられずにいる。布ごしに感じた彼の体温と、鼓動を思い出すたびに、真剣なまなざしで絵を描く彼の瞳に、自分の心が揺れ動くのを感じていた。
「もうすぐ、絵、完成するんですか?」
「郁ちゃんのおかげだよ、ありがとう」
間室画伯が、これほど早いペースで絵を描くのは珍しいらしい。

彼がこうして毎日のようにキャンバスに向かうことはめったにないそうなのだ。
　そもそもあたしがはじめて彼の絵に加わったとき、絵の大本はほとんど出来上がっていた。問題はモデルの女性で、その部分だけがいまいちはっきり描かれずにいたのだ。
「ねぇ、間室さん」
「んー？」
「やっぱり間室さんは、キスとかもできないんですか？」
　背中を向けているからこそ、できる質問だった。あたしは、赤くなるのが顔だけであることを願う。間室さんが今、どんな表情をしているのかと思うだけで、タオルに顔をうずめたくなった。
「……したことないからわからないけど、どうだろう？」
　ややあって、彼はそう答えた。
「彼女とか、いたりしなかったんですか？」
「子供のころから、外出もできなくてほとんど家にいたからね。家の窓から近所のお姉さんを見ているのが初恋だったかなぁ」
　それももう、昔の話だけど。苦笑まじりに、間室さんが筆を置いた。休憩のようだけど、コーヒーをいれる気配はない。

4

「自分は誰かと抱き合うこともできないと思うと、なんだか情けなくてね。この年して童貞なんだ、暴露しちゃうと」
本当に、背中を向けていてよかったとしみじみ思った。きっと彼も、顔が見えないからこそ言えたのだろう。
「この年してって言っても、まだ若いじゃないですか」
「最近の子はみんな早熟なんだよ」
間室さんが、立ち上がるのがわかる。そして手袋を新しいのに取り替えて、あたしのもとへやってくる。
「……窓から眺めているほうが、ずっとよかったな」
あたしを抱きすくめながら、間室さんは言った。
「目の前にいるのに、触れないっていうのは、とても辛い」
彼が腕の力を強めるとともに、あたしも腕の中のタオルを強く握った。
「郁ちゃん、こっち向いて」
うながされて、あたしは肩ごしに、間室さんを振り返る。
とても近くに、彼の顔がある。サングラスごしの瞳と、あたしの瞳が、まっすぐに合う。どうしていいかわからずに硬直するあたしに、間室さんが、唇を寄せてきた。
「間室さ……」
その唇は、あたしの唇とも頬とも言えない、きわどいところに触れた。
やわらかい、けれどすこしささくれた唇。それがほんの数秒、あたしに触れる。彼の胸に触れたときとは違う、その熱い感触に、あたしは思わず、そのまま身をまかせてしまいそうになる。
「……ごめん」
けれど彼は、その寸前、あたしから離れた。
「ごめん、郁ちゃん。こんなつもりはなかったんだ」

瞳を泳がせ、狼狽を隠しきれぬまま、間室さんは一歩ずつ後ろに下がってゆく。おろおろと口元に指を寄せるそのしぐさで、あたしはそれが演技だとわかってしまった。

かすかに見え隠れする、唇。それが赤く腫れていることを、彼は隠そうとしている。

「あたしこそ、ごめんなさい……」

けれどあたしには、それをわざわざ指摘することができない。目頭が熱くなるのをこらえて、とっさ顔をそむけた。

「帰ります。もう、モデルがいなくても大丈夫ですよね。バイト代とかいらないので、完成したら、見せてください」

じゃあ。そう言う唇が震える。あたしは間室さんを見ることもできずに、目に付いた荷物だけを手に取り、アトリエから飛び出した。

素肌の上に、カーディガンを羽織る。ボタンを留める指が震えて、あたしは思わず、その場にうずくまってしまった。

涙に濡れる指先を、そっと頬に寄せる。間室さんの唇の感触が、まだ残っている。

あたしは間室さんに触れることができない。

キスはおろか、手をつなぐことですらできない。布ごしじゃ嫌だった。肌と肌で、彼に触れたかった。

けれど間室さんは、あたしが触れると傷ついてしまう。ほんのすこし唇が触れただけで、あんなに腫れあがってしまうのだから。

辛いのはあたしだけじゃない。なにより一番辛いのは彼だ。あたしの肌なんて、彼の辛いことの、ほんのわずかなことでしかない。

白いものすべてがだめ。食べるものも限られてしまう。なによりも、この広い空を、雲を、じかに見ることができない。自分の見たままの世界を満足に描くことすらできない。

「間室さん……」

あたしには、どうすることもできない。

○○○

あたしのもとに間室さんから手紙が来たのは、それから一月が過ぎたころだった。
どうしてあたしの住所を知っているのだろう。疑問に思うけど、それこそ紹介してくれた親戚に教えてもらったに違いない。
『絵を完成させるので、見にきてください』
短い文面の最後に、完成予定日。間室さんはそれしか書いていなかった。ごく普通の五十円葉書にこれを書いた彼の姿を思いながら、あたしはアトリエへと足を運んだ。
いつもの紫色のサングラスをかけて、手には黒い手袋をはめて、彼は手紙を書いたのだろう。そして今日会うときも、彼はまったく同じ格好をしているに違いない。
「間室さん、郁です……」
アトリエに入るとき、あたしは声をかけた。
「……うそ」
そしてそのまま、かたまってしまった。
間室さんはいつもどおり、こちらに背を向けて、絵を描いていた。

5

青い空、白い雲、窓から見える木、見上げる女性、そして、白いカーテン。けれど実際に部屋にあるカーテンは、夜空のように濃い藍色をしている……はずなのに。

カーテンは真っ白だった。レースのカーテンと二重にして、紐でまとめずに風でなびかせている。部屋に吹き込む風にふかれて、蝶が羽根を広げるように大きくたなびいていた。

いつもは手袋をしているはずなのに。筆を握る手はなにもつけていない。

「ああ、郁ちゃん、いらっしゃい」

ふりむくその顔に、サングラスはなかった。

「ごめんね、まだ完成してないんだ。よければ、またそこでモデルやってくれると嬉しいんだけど……」

隔てるものなく、まっすぐに、彼は黒い瞳であたしを見ていた。その指先には、雲を描くために、白い絵の具がついている。

「嫌だったら、いいよ。そこで見ててくれるといいな」

「嫌じゃないです。やります」

はっと我に返り、あたしはTシャツのすそに手をかけた。

「でも、間室さん、大丈夫なんですか。そんな……じかに白いもの見ちゃって」

「一日くらいなら大丈夫なんだよ。そのあと一週間はほとんど見えなくなるけどね。経験でわかってるんだ。だから絵の仕上げには、ちゃんと色を確認するために、サングラスをはずすんだよ」

指で描くのは、そのほうが今回の絵にあう雲になるから。間室さんはそう教えてくれる。ちらりと見た絵は、最後に見たときよりもさらに繊細に描きあげられていた。女性の後ろ姿が妙になまめかしい。彼の目に、あたしの背中はこう映っていたのだろうか。

「本当に、大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。大丈夫だから、大丈夫なうちに完成させて」
あたしが窓際に立ち、肩にかけたバスタオルを外すと、間室さんの視線がぴんとはりつめた。
今日は、談話もない。ただひたすら真剣に、彼は絵を描いていた。しんとした中、吹き込む風となびくカーテンの音が響く。
サングラスがないからか、久しぶりだからか、彼の視線に高鳴る心がいつもより激しい。
その音があまりに自分に響くものだから、あたしはそれが彼に聞こえやしないかとひやひやする。けれど耳をすませば、かすかにお互いの吐息がさえずるだけ。
時折、カーテンが頬を撫でる。それがくすぐったいのと、間室さんが心配なのとで、どうも落ち着かない。

「――あと、名前いれるだけだから、もういいよ。郁ちゃん、お疲れ様」
そう声をかけると、彼は筆を置き、長いため息をつきながら椅子にもたれかかった。
「間室さん、大丈夫ですか？」
「大丈夫。大丈夫なうちに、こっちに来て」
手招きをする間室さんの目は、真っ赤に充血している。絵の具をふきとる手は、赤くただれ、まるで熱湯を浴びたかのようにあちこち水ぶくれができていた。
「冷やしたほうがいいんじゃないですか？」
「いいから、ここにいて」
よいしょと一声かけて、間室さんは立ちあがる。そしてあたしの正面に立ち、そっと、タオルの上から腕に触れた。
「一度こうなっちゃえば、ちょっとぐらい無理したって同じなんだ。だから今のうちに、郁ちゃんを見たいんだけど、いいかな？」
充血した目はさらに涙までたまっていて、あたしは嫌だと首をふりたくなる。けれど断ったところで彼はやめないだろうと思い、う

なずく代わりにバスタオルを床に落とした。
「あたしが日焼けして、肌を黒くしたら、間室さんも触れるようになりますか？」
「そんな風に考えないでいいよ。郁ちゃんは今のままが一番素敵なんだから、変わろうなんて思わないで」
「でも……」
なお続けようとするあたしの唇を、間室さんが指でおさえた。
また怪我をすると思い、あたしは慌てて離れる。あのときのように赤くただれやしないかとおろおろしていたけど、彼の指にこれ以上の変化は現れなかった。
「唇は白くないから大丈夫みたいだ」
にこっと笑って、間室さんはあたしにひとつ、淡いキスをした。
すぐに離れたその唇にも、以前のような変化はない。自分でも触って確認して、彼は深く安堵の息を吐いた。
「たださ、どうせキスするなら、抱きしめたいっていうの、わかる？」
返事を待たずに、間室さんはあたしを腕の中に引き寄せた。
おどろいて離れようとするけど、彼はまた唇を重ねてくる。彼は服こそ着ているけど、手袋はしていない。あたしの背中に触れる手は、間違いなく、白に負けてしまう。

6

「手ぐらいなら大丈夫。ちょっと僕の絵の具ついちゃうけど……ここまできたらもうどっちみち治る時間は一緒だからね」
「でも……」
「今だけ。今、このときだけ。こんなときじゃないと、僕は郁ちゃんに触れないんだ」
あたしの前髪をよけて、よく顔が見えるようにした手は、はりつめた皮膚が裂けて血がにじんでいた。瞳も瞳孔が広がりつつあり、涙にかすかな赤みが混じっている。それでもなお、彼はあたしを離そうとしなかった。
彼の顔が近づき、再び、口付けをする。
唇の間をすりぬけてくる熱い舌を感じて、あたしはまぶたを下ろし、彼に身体をゆだねることにした。

○○○○

「……唇は赤くても、そのまわりの肌はやっぱり白いんだよね」
椅子に腰掛け、ぐったりとした様子の彼は、真っ赤に腫らした唇でそう呟いた。
そんな間室さんに、あたしは水で濡らしたタオルを渡す。ありがとうと弱々しく返事をして、彼はまぶたを冷やし始めた。
「本当に……大丈夫なんですか？」
「心配しすぎだって。ちゃんとまた見えるようになるし、肌だってすぐに良くなるから」
完成した絵を見て、あたしは思わずため息が漏れる。ほとんどがあのサングラスごしだったというのに、本当に色彩豊かに描かれていた。この白い雲も、カーテンも、そしてあたしの背中も、身体が拒むはずの色を使って、とても美しく仕上がっていた。

「ああ……くそ」
うめき声を聞いて、あたしは大丈夫かと声をかける。そうじゃないと首を振った彼は、小さな声で「悔しいんだ」と呟いた。
間室さんは手を宙に泳がせて、あたしがどこにいるのか探している。だからあたしはそっと、肌に触れないよう彼の腕を握った。
「もうすこし長く触れると思ってたんだよ。でもだめだった……こりゃしばらく童貞のままだ」
あーあ、と大げさに息をついてみせる。
「知ってる？　男は三十まで童貞だと魔法使いになるんだよ」
とがらせた唇の痛々しさ。目が見えないことで、声が大きくなっている。あたしにすがりつく力がとても強くて、でも本人はそれをごまかすために明るく振舞っていた。
「ねぇ、間室さん……」
呼びかけられて、彼は話をやめた。
「あたし、これからもここに来てもいいですか？」
絵が完成した以上、モデルはもう用無しだ。そのことを今さらながら思い出したらしく、間室さんはいくぶん慌てた様子でうなずいた。
「もちろん。いてくれないと、困るよ」
「目が見えるようになるまで、一緒にいてもいいですか？」
「それはとても助かるよ！」
にわかに、彼の頬が色づく。凍えそうな肌が、次第に熱くなってゆくのがわかる。
「もうしばらく、童貞のままでいい？」
からかいを含んだあたしの言葉。
彼はそれに、にやりと笑った。
「郁ちゃんがいてくれるなら、喜んで」

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0983g/

白の、毒

2010年10月8日15時14分発行